コミ協だより

みなと

第20号

発行日　令和３年11月24日
発　行　湊地区コミュニティ協議会
総務部会　編集委員会

♫ 新しい朝がきた、
希望の朝だ……♪

爽やかな朝、ラジオから流れる〝ラジオ体操のテーマソング〟と共にコミハウス分館の広場は元気よく走り回る子どもたちで賑わっていました。

コロナ禍の中でしたが広々とした「公園」は密になることなく開催できました。

- 6年生が体操のリーダーに（4～5人）
- 中学生、高校生の参加も
- 幼児を含む親子連れが多かった。

様々な場面からラジオ体操の魅力は老若男女誰でもが楽しめて、健康づくりに役立っていると感じました。

期間中に東京オリンピックの開会式もあり、最後の方には台風8号の接近に「ヒヤヒヤ」しましたが一度も休むことなく開催できてよかったです。

「参加賞」として子どもたちには「コミ協」から「図書券」を手渡ししました。

（文教部）

令和3年度 定期総会

本年度は、昨年に引き続き新型コロナウイルによる感染対策による自粛規制の中で始まりました。

湊地区コミュニティー協議会の事業も前半の事業を休止し、後半の行事を中心にして実施することとなりました。

このような状況から、令和3度の定期総会は昨年度に引き続き書面議決による総会開催となりました。皆様方からは多大なご理解とご協力をいただきご提案した全議案について「承認」のご決議を頂きました。ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

新設された湊地区コミュニティー協議会の「事務室」は、ようやく事務室らしくなりました。地域の方々のご要請にお応え出来るよう努めて参ります。

よろしくお願い申し上げます。

令和3年度 事業計画

本年度の事業は、新型コロナウイルス感染の終息が見られない現状から、年度の前半の活動は休止し、10月以降からの事業に集中することと致しました。

令和3年度 活動計画

■文教部会

ラジオ体操　7月末
秋の花めぐり（厚生部会と共催）
歌声喫茶

■厚生部会

健康講座
「よりな～れ」
第1、第3木曜日午後1時
於　二葉コミハウス4階
地域の茶の間「なじらて」
毎週水曜日午前9時30分
於　二葉コミハウス分館
防犯講座（漫談）
ヤクルト・「おせち」年末の配布

■防災安全部会

日本赤十字社　活動報告

■生活環境部会

曙公園清掃活動
竹内式部墓地清掃
日和山住吉神社清掃

令和3年度 活動基本方針

① ひとり暮らし高齢者や高齢者世帯への見守り、友愛訪問活動の推進、地域の茶の間「よりな～れ日和山」と「なじらて」に充実を図り、高齢者の居場所づくりに努めます。

② 中央区社協、中央公民館、包括支援センターふなえ等と連携して住民福祉の寄与する事業に取り組みます。
今年も「花めぐり」、「マジックショー&餅つき大会」「健康講座」等を開催します。

③ 今年も、「夏休みラジオ体操」を湊地区全体として取り組みます。

④ 地域環境整備のため、公園や施設の清掃美化活動並びに海岸一斉清掃に積極的に参加します。

⑤ 日和山小学校、新潟柳都中学校を軸に4コミ協とも連携し、セーフティスタッフ・交通安全協議会の充実を図り、児童生徒の交通安全に努めます。

⑥ 広報誌「みなと」の発行をとおして、コミ協活動や地域の情報を提供し、地域住民の皆様のご理解とご協力を得られるよう努めます。

湊地区コミュニティー協議会
電話番号
025―378―0372

湊地区コミュニティ協議会役員

会長	三條　澄
副会長	大野義彰
副会長	田邉龍治
副会長	梶　瑤子
副会長	佐島清治
副会長	田中雅史
監事	中山茂夫
監事	成田久代

最近の茶の間

コロナ禍の中「茶の間」の活動は、様々な面で制約があり、認知症予防の体操や腰痛予防の体操、それとお茶を飲みながらの様々な情報交換が主な活動になっていますが、最近は「郷土の歴史カルタ」ができあがったので水曜・木曜の活動にカルタ取りを入れています。

例えば、この絵札は「砂の町黒松植えて防砂林」の文句が読み札で、その裏に、「町民による砂防の様々な試みが、江戸中期からあった。一八四八年新潟奉行川村修就（ながかた）浜沿いの本格的な植林開始を命令。明治になって湊小の植林を契機に浜沿いの各小学校で、担当箇所を決め植林。」などと解説もできるようにしています。
※勉強にもなるので子供の居場所などができたら利用しようと思っています。　（厚生部）

大河津分水通水百周年・関屋分水通水五十周年によせて

田辺龍治

普段は洪水の被害など気にすることなく過ごしていますが、実は私達が安心して生活できるのは信濃川を中心とした治水事業が連綿として行われてきたからなのです。今回の「みなと」は、来年度が大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年にあたる年という事もあり、私達が共通認識として持つ必要のある信濃川の洪水と大河津分水などのミニ知識の確認をしたいと思います。

信濃川368㎞（信濃川153㎞＋千曲川214㎞）は、新潟地域の形成のほとんどを担い、日本有数の米どころを創り上げましたが、長年にわたって大変な被害を新潟に及ぼしていました。記録によれば、江戸時代には64回もの洪水を起こし、明治以降でも24回の洪水を引き起こしています。その中でも最悪の洪水は1896年（明治29）7月22日の「横田切れ」と言われる大洪水です（横田地区の信濃川が300㍍に渡って破堤）。

12月になっても水が引かず、翌年も洪水が発生しました。死者43名・流失家屋25000戸・被害面積18000㌶（琵琶湖の三分の一弱）に及ぶ大洪水でした。別の角度でこの被害をみると。

農業従事者の中の小作人比率が、明治28年には西蒲原郡の小作

人51％、中蒲原郡の小作人58％であったものが、明治33年にはそれぞれ61％、63％と増加し、洪水等によって生活が破壊され、自作農から小作農に転じた農民が多かったことが分かります。

江戸時代にも分水開削は何度か行われましたが、信濃川の水量の減少が水運（新潟～六日町・新潟～十日町　米・塩）に悪い影響を与えると考える者も多く、なかなか、分水開削に舵をとることができませんでした。

しかし、「横田切れ」を契機に大河津分水開削の世論が高まり、明治42年（１９０９）に東洋一といわれる大河津分水工事が着工しました、工事従事者延べ１０００万人・死者84人の大事業となり、幾多の困難がありましたが大正11年（１９２２）大河津分水完成の運びとなりました。その後、一度、破堤がありましたが、新潟市域では曽川切れ（大正６年・１９１７年10月・沼津に上陸した台風による大雨で亀田を中心に８００㌶浸水・農地の93％全滅）が、現在のところ大きな洪水の最後になっています。（大河津分水双書などから抜粋）しかし、その後も、死者を出すほどの甚大な被害はないものの洪水に近いものは２～３年に一度の割合で起きており。それらを受けて、１９６８年親松排水機場完成、１９７２年関屋分水路完成、２００３年鳥屋野潟排水機場完成と信濃川の治水設備工事は着々と進んでいます、しかし、平成16年の新潟・福島豪雨の事は、まだ記憶に新しい事と思いますが、そのように、水との戦いは現在も続いています。

◉洋食器産業

ところで、日本でも有名な三条・燕の洋食器産業は、信濃川の洪水に由来しています。この地域の洋食器産業のスタートは和釘の製造でした。釘そのものは、エジプト・メソポタミアで青銅製のものが発掘されていますが、日本のものは砂鉄を原料とする純度99％の鉄製で、古くは弥生時代中期の遺跡からも発見されています。現存する建築物でその使用が確認されているものは、法隆寺の金堂や東大寺の三月堂です。

・和釘製造の始まり

この和釘の製造が、三条・燕で始まったのは江戸の初期１６２５年頃ということです。前述のように三年に一回、洪水に襲われるこの地が稲作に向かないということで、当時の代官（三条城主・市橋長勝の代官・大谷清兵衛）が、江戸から釘鍛冶を呼んだのが最初とされています。五十嵐川と信濃川の合流点で砂鉄が大量にとれ、それを利用したということです。

和釘は一本一本叩いて作るためコストも掛かりますが（現在の値段１本百円から七百円程度）四角錐なので打ち込み安く抜けにくく、錆びにくいということで、現代でも伊勢神宮の式年遷宮の七万本をはじめとして各地の神社仏閣で使用されています。

和釘の生産が始まった当初は福井の小浜村と共に和釘の二大産地として知られ千人ほどの職人がいたということです。またできあがった和釘は三条の金物問屋の手で船便で六日町を経由し三国街道を通って、江戸に運ばれたということです。

・銅器製造と技術の継承

その後、弥彦山西山麓で銅山が発掘され（１７００年　田辺善兵衛など）、銅の精錬工場ができると、仙台や会津から職人が招かれ、銅器の製造もわずかではありましたが始まりました、しかし、銅山は５年ほどで閉山したとのことです。また明治に入り洋釘が輸入されるようになると和釘はその使命を失ってしまいました。また銅器に関しても戦争の時代になると軍需用品が中心となりました。

しかし、戦後になると生活様式の変化にともなって金属洋食器の需要が高まり継承されていた技術も日の目を見、現在の隆盛につながったとのことです。

まさに、現在の洋食器産業は洪水の歴史の中から生まれたものと言えるでしょう。

（燕市史より抜粋）